

28. サルの生息域コントロール

(1) 盆堀群異常行動の要因に関する考察

村田仁

〔目的〕

1998年からトウガラシ爆弾で「生息域コントロール試験」を行っていた盆堀群から分派した小群の行動を追跡したところ、特異な行動が見られたので、その要因を探り、結果をサルの生息域コントロールへ活用することを考えた。

〔方法〕

1. 群の行動探知 ---- 発信器を装着した群の亜成獣牝1頭から発信される電波を受信機で探知しながら追跡した。
2. 調査内容 ---- 小群の行動域と食性を調査した。
3. 試験期間 ---- 2000年12月7月23日から9月30日まで。

〔結果〕

2000年の盆堀小群における特異な行動をまとめると

1) 図 - 1のように、8月下旬から9月までの行動域は、約300haで、昨年の同時期の行動域と比べると、20%に減少していた。また、戸倉から青木平にかけて点在するクリ畑を取り囲むように行動域が形成されていた。

2) 点在するクリ畑を取り囲むように移動し、クリ畑に接近したり、その周囲に滞留していたが、クリ畑に侵入したり、クリを食害したりすることはなかった。通常であれば、表 - 1のように、畑のクリを主食としている時期であるが、8月23日と24日に小宮駐在所周辺の畑でカボチャ、トウモロコシ等を食害し、また、9月5日に盆堀でズの新芽、ヤマグリを採餌、9月6日にはアケビ、ヤマグリを採餌しているのを確認した。この間も、畑のクリへの採餌行動は見られなかった。しかし、9月中旬以降、行動域内にある放置畑3カ所でクリの採餌行動はあった。

1999年の「忌避材炸裂装置による学習効果を利用した群のコントロール試験」を行った荷田子と久保河原試験地が、図 - 1のように小群の行動域内にあることから、コントロール試験効果が持続していたための特異な行動と考えることができる。しかし、八王子地区に生息する群のクリの食害も大きく減少していることから、他の要因も考えられる。その一つとして、アケビの種子が混入した糞の発見が昨年より15日早かったことや、千葉県でも8月中旬からアケビを採餌していたことから、9月中旬からサルの主食となるアケビが、豊作で且つ熟成時期が早かったことが推測される。この要因の解明が、野生サルと人の共生手法を確立する上で重要なポイントになると考えられるので、追跡調査の継続を検討する。



図一 群の行動

- 凡例
- 平成11年度コントロール試験箇所
 - クリ畑
 - 放棄クリ畑
 - 平成11年度の行動域
 - 平成12年度の行動域

表一 群の食性

月		通常の食性パターン	平成12年度の食性
8月	中旬	カキ(農地)	
	下旬	カキ、クリ(農地)	8/23、24 カボチャ、トウモロコシ、ナス、キュウリ、カキ
9月	上旬	クリ(農地)	9/5 クズの新芽、ヤマグリ、9/6 アケビ、クリ
	中旬	クリ(農地)、アケビ、ヤマグリ	9/10、12 アケビ(農)、9/17、18 クリ(放棄畑)
	下旬	ヤマグリ、アケビ	9/24 クリ(放棄畑)